対　象…障害・難病のある方、ご家族・介助の方、一般
会　場…石垣市民会館 中ホール
入場料…無料
主　催…文化庁
共　催…石垣市
後　援…沖縄県、竹富町、竹富町教育委員会、沖縄県社会福祉協議会、石垣市社会福祉協議会、石垣市身体障がい者団体協議会、沖縄県身体障害者福祉協会、沖縄県聴覚障害者協会、沖縄県視聴覚障害者福祉協会、琉球新報社、沖縄タイムス社、株式会社八重山日報、株式会社八重山毎日新聞社、NHK沖縄放送局、琉球放送、琉球朝日放送、沖縄テレビ
協　力…琉球補聴器
受託・制作…一般社団法人 琉球フィルハーモニック

ゆいまーるミュージックプロジェクト 主なメンバー

仲根 建作（公益社団法人全国脊髄損傷者連合会 理事／身体障害当事者）
渡久地 準（キコエサポートラボ 代表／聴覚障害当事者）
照屋 尚子（おきなわふくしオンブズマン／障害当事者家族）
島村 聡（沖縄大学 人文学部福祉文化学科 教授）
宮城 潤（那覇市若狭公民館 館長）
読谷山 こずえ（ソプラノ歌手／視覚障害当事者）
謝花 勇武（シンガーソングライター／身体障害当事者）
高良 幸人（音楽療法士）
樋口 貞幸（社会福祉士／アーツアドミニストレーター）
上原 玲子（プロジェクトリーダー／株式会社RedPro代表取締役）
上原 正弘（琉球フィルハーモニック 代表理事）

一般社団法人
琉球フィルハーモニック

「音楽と共にまちと響きあう」を理念に、プロ演奏家の活動の場として「琉球フィルハーモニックオーケストラ」「琉球フィルハーモニックジャズプレイヤーズ」と、子どもたちの育成の場として「那覇ジュニアオーケストラ」、音楽による子どもの居場所づくりとして「ジュニアジャズオーケストラおきなわ」の運営を行っています。

一般社団法人CoAr（コア）による、
今回のコンサートに対する
評価調査結果。

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和6年度障害者等による文化芸術推進事業
ゆいまーるミュージックプロジェクト

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

一般社団法人 琉球フィルハーモニック
〒901-0156 沖縄県那覇市田原1-12-6
080-6497-8049
https://ryukyuphil.org

だれもが共に音を楽しむ場をつくる

琉球フィルハーモニックオーケストラによる
第6回「美ら（ちゅ）サウンズコンサート」の記録＆つくり方

美らサウンズコンサートとは

琉球フィルハーモニックオーケストラによるバリアフリーなコンサート。
障害当事者や音楽、福祉など専門家が集い、障害のある方やご家族が
コンサートを楽しんでいただくための環境づくりを話し合う
「ゆいまーるミュージックプロジェクト」を結成し、
2019年からコンサートを開催しています。
障害のある人もない人も、身体が動いたり、声が出る人も、
難病の人も、赤ちゃんやお年寄りのご家族も、来場いただけます。
本公演では障害のあるアーティストをゲストに迎え、
交流を深めていく場にもなっています。

プログラム

F.ディーリアス
小管弦楽のための2つの小品より
「春はじめてのかっこうの声を聴いて」

G.A.ロッシーニ
歌劇「セビリアの理髪師」序曲

ヨゼフ・シュトラウス
「鍛冶屋のポルカ」

ルロイ・アンダーソン
「タイプライター」

リラックスタイム リズム遊び
赤羽 一則
（琉球フィルハーモニックオーケストラ 客演打楽器奏者）

ゲスト×オーケストラ

琉-RYU-

竹富島古謡　編曲：新垣 雄

「安里屋ユンタ」

作詞作曲：琉-RYU-　編曲：新垣 雄

「ニライカナイ」

ゲーム音楽

坂本 英城

「ザ ファイナル タイムトラベラー」

指揮者体験

元気いっぱいメドレー

ヘルマン・ネッケ

「クシコス ポスト」

↓

D.B.カバレフスキー

組曲「道化師」より「ギャロップ」

↓

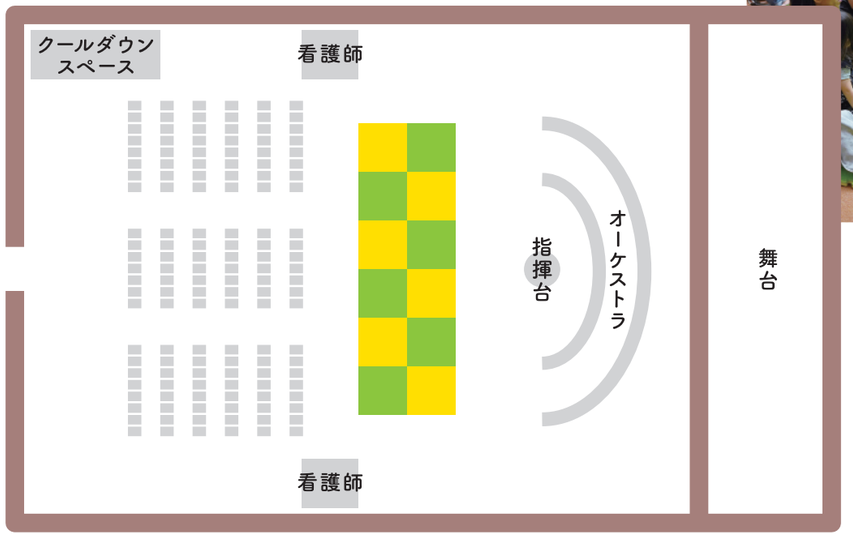
A.I.ハチャトゥリアン

組曲「ガイーヌ」より「剣の舞」

アンコール

映画「エデンの東」より　メインテーマ

会場は石垣市民会館中ホール。
2回目の離島での開催となりました。



写真に写りたくない人には「撮影NGリボン」を配布。

呼吸器などのための電源確保。

前方にシートを敷き、小さな子ども連れの方などが自由に座る場所を選べます。

車椅子介助の方と並んで鑑賞。

スムーズに入場していただくため、受付はQRコードを活用。手をつないでおく必要がある人がいるので、受付が終わってから会場に入る直前にプログラムやアンケート用紙を手渡します。

手話通訳

最新のFM補聴システムをモニター使用提供という形でご協力いただきました。電波法で定められた福祉電波を使用し、来館された聴覚障害者の方々にヘッドフォンやお手持ちの補聴器を使って、場内の音声をクリアーに聞いていただくシステム。

UDトークはコミュニケーションのUD（ユニバーサルデザイン）をサポートするアプリで、視覚聴覚障害間や多言語コミュニケーションなどに用いられています。当日のプログラムに、UDトーク表示用のQRコードを掲載。

ボランティアスタッフ体制

統括&舞台監督

事務局&会場・受付統括

ボランティア統括

ボランティアリーダー

障害児・者に関わった事のある方、学生ボランティアへ指導助言ができる方で、信頼関係のある方に依頼。コンサート前日に打合せを行い、当日のスケジュールや配置、動き、現場を確認しました。

ボランティアの役割

駐車場案内

車椅子誘導

体調確認（看護師）

受　付

ホール案内

トイレ案内、フリースペースへの案内、親子席への案内を行いました。

障害者当事者家族 のまなざし

おきなわふくしオンブズマン 照屋尚子さん

障害のある方によって導かれたコンサート

私の息子は重度知的障害と自閉症で、発語はありませんが、ジャンルを問わず音楽が大好きな（ロックだけは苦手）、今年30歳の青年です。幼少期はリトミック教室や音楽療法に通い、キリスト教会附属の幼稚園では、毎日讃美歌を聴いて過ごし、ダンスや合奏、劇にもクラスのみんなと一緒に出演しました。特別支援学校在学中は、芸術鑑賞会で雅楽、バレエ、バンド演奏を鑑賞する機会もありました。
高等部の音楽部は自力通学ができる、軽度、中度の生徒しか入部できませんでしたが、母の私が送迎することで、重度の息子も入部。息子の目標はみんなと一緒に舞台に「立つ」ことでしたが、発表会の舞台に立つことができました。

ところが高等部卒業後は自宅と作業中心の事業所との往復だけで、音楽に触れる時間が一気に減りました。幸い家にはPIANOとキーボードがありましたので、息子は事業所から帰るとPIANOを弾くことがルーティンに。
どうしても、音楽が大好きな息子に音楽に触れてもらいたくて、知り合いの音楽家を自宅（息子が一番落ち着く場所）に招き、息子のPIANOとチェロ、ヴァイオリンの即興演奏をしていただいたこともあります。

第一回目のプロジェクト会議から障害当事者が参加し、「障害者やその家族、支援者が安心して参加できるコンサートとは」「障害当事者視点の会場作り」が話し合われてきました。
私は知的障害、それも息子の立場で代弁をしてまいりましたが、回を重ねる毎に、他の障害種の困り感や課題を理解できるようになりました。
「コンサートにおいて全障害種にできる限りの支援」という課題を共有し、「どのような支援があるのか追求する」という諦めない事務局の姿勢に感銘を受けました。

私はボランティア統括として、スタッフとして、特別支援学校のPTA役員の時の仲間や県教育委員の時にお世話になった先生方とのつながりで、コンサートの集客案内、ボランティアの協力を得ることができました。事務局も私を信頼し、委ねてくださったことに心から感謝しています。

12月3日の国際障害者デーに寄せるアントニオ・グテーレス国連事務総長メッセージの中に次の言葉がありました。
「すべてのコミュニティーにおいて、障害者は変革の担い手であり、ピースメーカーです。そして、リーダーでもあるのです」
「美らサウンズコンサート」を開催できたことも、スタッフ、ボランティア、演奏者や来場したお客様が障害者に出会い変容していったことも、国連事務総長のメッセージのように、障害のある方が変革の担い手であり、ピースメーカーであり、障害のある方によって導かれたコンサートだと実感しています。

大学教員 のまなざし

沖縄大学人文学部福祉文化学科 島村 聡さん

美らサウンズコンサートの福祉「共育」的な意義

「美らサウンズコンサート」に参加した本学の学生がこんな話しをしてくれました。
「障害のある人が演奏に反応して跳びはねる姿を見て、音楽が理解できていることに驚いた」
重い知的障害のある人には音楽の意味がわからないのではないかと感じている人は大勢いるでしょう。もちろん認識違いです。
また別の学生は「琉球フィルの皆さんの演奏が、まるで聴きに来た障害のある人たち一人一人を見守っているかのように聴こえた。しかも皆さんとても楽しそうに」と。「福祉の支援をすることは崇高な行為であって、一般の人には難しいことだ」と彼も考えていたようです。実はそうではないのです。

これら2つの点に福祉「共育」の大切な意味が含まれています。1つ目は自分の周りの「福祉課題に気づく」ことです。生きづらさを感じている人の存在を知り、その人が抱える生きづらさとは何かを理解すること。「重度の障害がある人には音楽を理解できない」という思い込みがあると、障害がある人に音楽を聴く機会を提供するなどと思いもしないでしょう。まず、その思い込みから多くの人を解放し、多くの人に「障害があっても本格的なオーケストラの演奏を聴くことに意義がある」と考えていただくことが大切です。

2つ目は「共に生きる」ことです。これは障害があってもなくても、どちらが担い手でもなく、受け手でもなく、支え合っていける社会を目指そうという意味です。琉球フィルの皆さんが取り組んだのは、自ら持つオーケストラの魅力をどうすれば、様々な障害のある人たちに伝えられるかという工夫でした。演奏会場を誰でも入場でき、どのような姿勢でもよく、声を出しても歌っても構わない場とする合理的配慮を行ったわけです。障害があってもなくても、共にいることができる場がつくられました。

これらのことだけでも「美らサウンズコンサート」の福祉「共育」的意味は深いと言えます。でもこの2つのことを掘り下げてみると、さらに社会的なインパクトを高める可能性があります。まだまだ県内には本格的な演奏会に参加した経験がない障害のある人たちがいます。それらの方々にも演奏を届けていくことで、諦めないでよいというメッセージを届け続けることが求められます。昨年の宮古島、今年度の石垣島での演奏は大変意味がありました。「福祉課題」に気づいた協力者が各地に増えて、演奏会があちらこちらで開催されること。そしてすべての障害のある人に生の演奏に触れる機会を提供することで、音楽の持つ力を糧に前向きな地域生活を送ることができる人たちが増えるという期待感があります。

また、美らサウンズコンサートで行ってきたユニバーサルな会場づくりがノウハウとして広まることで、他の演奏家たちが同様の演奏会にチャレンジしてくれるという期待もあります。実行委員会が公開している会場設営の様子を示したパンフレットは「共に生きる」ための重要なツールとなり、他の演奏家に対して積極的なノウハウの提供をおこなうことで、「ユニバーサルな演奏会」が多く開催されることを期待したいところです。

今後は全国で活動する仲間とも連動して、より質の高いコンサートになっていく可能性があります。オーケストラが「共に生きる」社会づくりに大きく寄与するという考えてもみなかったことが身近なものとなりつつあります。より多くの学生たちにも関わってもらい、「共育」的な意義も高めていければと考えております。

アーツアドミニストレーター 社会福祉士 のまなざし

樋口貞幸さん

音楽で『共にいられる場』をつくる

これまでに、芸術を媒介として、さまざまな背景をもった人たちが〈共にいられる場〉をつくる活動に関わらせていただく機会に恵まれました。琉球フィルハーモニックが取り組む『美らサウンズコンサート』は、まさにそうした活動のひとつです。このコンサートは、あらゆる障害のある方とその家族や支援者に、劇場でクラシック音楽を鑑賞する機会を提供するものです。こう言ってしまうといわゆる音楽鑑賞会なのですが、「音楽が奏でられている間、障害の有無を超えてだれもが共にいられる場が生み出されている」と捉えてみると、美らサウンズコンサートでやろうとしていることがおのずとみえてくると思います。

オーケストラに限らず、劇場に赴いて芸術を鑑賞することは、かけがえのない経験だということは言を俟たないでしょう。意識する機会は少ないかもしれませんが、日本は都市部のみならず、思いのほか地方の隅々まで劇場（文化会館）が整っていて、沖縄県内においても、国立の劇場をはじめ、公立・民間を合わせ30を超える劇場があります。その割には、障害者とその家族がこれら劇場で芸術を鑑賞する機会は、いまだ限定的と言わざるを得ません。それはなぜでしょうか？

ひとたび劇場に入ると、その広い空間に心躍るとともに、なぜかちょっぴり緊張してしまうことがあります。そこが日常から離れた特別な場所だからかもしれません。たくさんの聴衆といっしょに音楽を聴くというのも緊張する理由なのかもしれません。この非日常性が、障害の種類や感受性の高い方にとっては、来場のハードルを高めている要因になることがあります。また、音響効果や舞台を見やすくするために、すり鉢型に迫り上がった客席の構造により、車椅子やストレッチャーの移動が制限されたり、手すりのない階段が、足の悪い方や走り回ってしまったときの転倒につながりかねません。舞台に集中しやすくするために、上演中は客席を薄暗くするというのもハードルになる場合があるでしょう。トイレの心配や劇場までのアクセスの不安もあります。何より高い障害となっているのは、心理的なハードルです。とりわけ「静かに聴くもの」という認識があるクラシック音楽では、立ち上がったり大きな声をあげたり、咳き込んでしまうことが周りの迷惑になるんじゃないかと気が気じゃなくて、リラックスどころか申し訳ない気持ちになってしまいかねません。
劇場はあまりにも障害が多すぎて入りたくても入れない、ストレスフルでそもそも行こうとすら思わないと考えるのは、ある意味で当然のことのように思います。

ひるがえって、アートマネジメントの視点から捉えてみると、こうしたハードルを取り払うことができれば、新しい顧客創出につながるという見方もできるはずです。地方のオーケストラを取り巻く運営の厳しさは年々高まっています。日本のオーケストラがどうあるべきか、いかにクラシック音楽の裾野を広げていくのかという議論はゆうに20年以上に及び、さまざまな試みが各地のオーケストラでなされています。プログラムの工夫や合理的配慮によって、障害者、その家族や支援者という潜在的な顧客のニーズに応えることは、地方のオーケストラのありようと持続可能性を考える上で、極めて重要な観点となるでしょう。

では、演奏者にとってこの美らサウンズコンサートでの経験はどのようなものでしょうか。普段のしんと静まり返った会場とは打って変わって、ざわざわと落ち着かない中で演奏が始まります。演奏中に目の前で突然立ち上がったり、静かな曲調の中で大きな声が会場に響くこともよくあります。演奏者はこのような状況であっても、高いパフォーマンス力が求められます。

コンサートが進むにつれ、動きだす理由や大きな声が、あながち演奏と無関係ではないことに気づく瞬間があります。音楽と会場との相互のコミュニケーションが成立した瞬間です。この経験が演奏者の奏でる音にどのような変化をもたらすかは検証のしようがありませんが、演奏時の心持ちに影響を与えていることは疑いようはないでしょう。

次に、『公共』劇場の使命について考えてみます。端的に、あまねく市民に文化芸術を享受する機会を提供することに尽きると思います。これができなければ、公共としての役割がそもそも果たせていないと捉えられてもおかしくはありません。
2018年6月、『障害者による文化芸術活動の推進に関する法律』（通称、障害者文化芸術推進法）が施行されました。これまでの長きに渡り障害者による文化芸術活動に取り組んできた多くの方々の実践の積み重ねのもとに、この法律が制定されたことは言うまでもありません。
本法は、その基本理念に「文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利であることに鑑み、国民が障害の有無にかかわらず、文化芸術を鑑賞し、これに参加し、又はこれを創造することができるよう、障害者による文化芸術活動を幅広く促進すること。」（第3条1項）と掲げています。つまり、文化芸術もまた基本的人権であり、文化的生活を営む上で欠かすことのできないものだということです。この理念の実現に、劇場だけで取り組むのではなく、芸術団体だけが実践するのでもなく、障害の有無に関わらずあらゆる人が芸術活動に参画していくことが肝要です。

音楽で共にいられる場をつくる。美らサウンズコンサートのような取り組みが、あたりまえのこととして全国各地で繰り広げられることを願ってやみません。

社会福祉士 精神保健福祉士 のまなざし

津嘉山航さん

目が見えなくなっていくなか、三線片手に勝負する「琉-RYU-」

高い声質とハスキーボイス。「琉-RYU-」こと上地義人さんの歌声と琉球フィルハーモニックオーケストラのコラボによる演奏を聴いた途端、全身に鳥肌が立った。八重山発祥の「安里屋ユンタ」、そして琉-RYU-自作の「ニライカナイ」は、これまで聴いたことのないような重低音と繊細な音が重なり合い、琉-RYU-の歌三線と調和して、集まった会場の聴者に感動を与えた。涙が溢れた。

「今年度の美らサウンズコンサートは石垣島開催。八重山の障害のある方でどなたかご紹介いただけないでしょうか？」と声をかけていただき、琉-RYU-以外にいないと即答した。
琉-RYU-こと上地義人さんは、元当社の社員である。もとをたどれば当社の運営する就労継続支援A型事業所の利用者だった。
最低賃金を補償しなければならない就労継続支援A型事業所において、マンゴーや島野菜などを栽培販売する事業を運営していた。夏場はビニールハウスの中は50℃を超える暑さの中で作業を強いられ、農地が丘の上にあることで冬場は風雨が吹きつけた。ある日、利用者だった上地さんが退職を申し出た。理由をたずねると、疾患によって年々目が見えなくなっていることや、足を引きずって歩くほどになりつつあるなかで「元気なうちに夢だった歌い手として三線片手に勝負したい」。
ふとして描いていた私自身の夢と合致した。夜、目が覚めて活動的になる障害のある方々の相談にのっていた。夜に活動できる場がつくれないか。そうだ、三線居酒屋をつくろう！
「辞めることはない。あなたを正社員として採用し、店長として任命します。思う存分ご自分の描いていた歌い手として活躍できる場をつくってみては？」と口説いた。

店舗のレイアウトやメニュー、価格の設定、料理人の採用に至るまでを上地さんが担い、「三線ライブcafe＆diningゆにば」という店名も彼が命名。調理補助や食器洗浄、接客・フロア補助など障害のある方々の就労支援の一環になればと、2018年1月開業した。琉-RYU-は店長兼歌い手として活躍した。彼の歌声とおしゃべりに魅力を感じたファンやリピーターが生まれた。

2020年2月、沖縄県内で初の新型コロナウイルス感染者の発生後、緊急事態宣言などで来客と売上は激減し、国の支援策に頼るも固定費の支出はかさむばかり。琉-RYU-は退職と閉店を申し出た。何度となく説得し保留してもらっていたが、開店して2年後、最終的には留めることはできなかった。

琉-RYU-が美らサウンズコンサートin石垣島にゲスト参加が決定した時には心躍った。
石垣島現地スタッフの一人として、実行委員として、携わらせていただいたことに心から感謝の意を伝えたい。

このコンサートの意義深さと新たな可能性について感想と意見を述べたいと思う。

第一に、石垣島を含む八重山地域は古典民謡や舞踊の盛んな地域で、数々の歌手を生み出している芸術の地である。ただ、オーケストラや演劇のようにプロの演舞を目の当たりにする機会は乏しい。プロスポーツ選手も多く排出し、選手と触れ合う機会は度々あるが、文化芸術活動のプロと接する機会は少ない。障害者にとってはさらに稀な機会である。そんななか、一般的なコンサートとは違い、「車椅子やストレッチャーでゆったり鑑賞」「跳びはねてもOK!」との呼びかけにもあったように、当日はマット上で横になりながら鑑賞している方もいれば、音楽に合わせて声をあげたり、離席したり、体を揺らしたり、来場された聴衆が各々に楽しまれている様子が見られた。

第二に、「これまで通り、これで良い、現状維持」という既成概念にとらわれない新たな試みが通例通説になるということ。
東京、埼玉の障害者支援施設に勤め、2001年にUターンして以降、地域の障害児者支援と地域資源の創出に携わってきたソーシャルワーカーの私にとっても、刺激的かつ反省する機会になった。
毎年開催される障害者の集いや美術展、スポーツ大会、バザーなどの催しは、独自性・創造性・柔軟性に欠け、形骸化している部分は否めない。本物に触れる場として変革する必要もあるのではないかと猛省した。

第三に、行政との関わり方である。今回、実行委員の皆さんと共催者に挨拶回りをし、協力依頼をしたものの、当日来場した行政職は皆無に等しい。開演当日はイベントだらけだったのは承知しているが、一人でもどのような内容か把握し、課内で報告してほしいものだ。共催している以上、シフトを組んで業務で携わり、文化芸術活動の重要性を障害者計画に盛り込んでいくことも必要ではないかと感じた。

琉-RYU-こと上地義人さんの話に戻る。彼はいよいよ島を離れる。拠点を石垣島から県外に移し、音楽の道を歩んでいく。目もほぼ見えなくなって生活に支障が出ているようだが、自分を受け入れ、自らの素直な想いに耳を傾け、幸せな人生を送るために、自己変革し続けている彼を心から応援したい。
私自身も変革と刺激を生み出せるよう前進しようと思う。

きっかけ

20数年前、児童障害者施設で、琉球フィルハーモニック代表の上原正弘のホルンと上原玲子のピアノを演奏した時、事前に知識がなく、子どもたちの反応から、演奏が気に入らないのではないかと思ってしまいました。音楽療法士から「声をあげたりするのは喜びの表現であり、痰を吸引せずに出せるのはリラックスしている証拠」だと聞いて、初めて喜んでもらえていたことがわかりました。また障害当事者の家族の友人との会話の中で、「クラシックコンサートが好きだけれど、聴きに行く機会がない」と聞いたり、障害があるアーティストとの演奏旅行で行った先で、バリアフリーマップで選んだお店に2cmほどの段差があり、入店できなかったことも。そういった経験が、「美らサウンズコンサート」を始めるきっかけになりました。

コンサートをふりかえって

これまでの美らサウンズ

2019年 与那原町観光交流施設アリーナ

2019年に始めたプロジェクトは何もかも初めての試み。1回目の会議では様々な障害のある方々が同じ空間にいて、みんなが気持ちよく鑑賞できるゾーニングなどの環境をどうデザインしていくか、運営体制をどのようにしていくか、どのようなサポートを行っていくのか、コンサート全体の構成や選曲についてなど、それまで開催してきたオーケストラコンサートのノウハウでは対応しきれないことが次々と提案されました。

障害のある方から「"障害"の字は自分たちが社会と関わる時に障害を受けているので、漢字がいいです」と聞いて、漢字表記を選びました。

ゲストには車椅子ユーザーのボーカルのバンド、視覚障害の方のバンド、精神障害の歌手の方の3組を迎えました。

2020年 与那原町観光交流施設アリーナ

雰囲気の違うプログラムの2公演を開き、「ワクワク公演」では気軽に楽しんでいただく曲、「クラシカル公演」では本格的な曲をと選択できるようにしました。「ワクワク公演」のゲストに視覚障害のシンガーソングライターと車椅子ユーザーのボーカルのバンドを迎え、「パプリカ」という曲では那覇ジュニアオーケストラの子どもたちによる手話ソングも披露しました。

2021年 与那原町観光交流施設アリーナ、与那原町上の森かなちホール（ライブ配信）

2つの市・町で2回公演開催を計画していましたが、コロナ禍で1か所は無観客ライブ配信のみとなりました。毎年参加してくれているボランティアも増え、安心してお任せできるようになりました。無観客ライブ配信では、入院患者や外出困難な方がリモートでも参加できる工夫として「リモート指揮者体験」を試みました。

2022年 うるま市きむたかホール

前年に無観客ライブ配信になった地域のホールがコロナ禍で改装工事を行い、ステージと客席がフラットにできるようになり、初のホール開催ができました。フラットエリアと固定席の間の仕切り壁の前のスペースで、車椅子やストレッチャー利用の方にお好きな場所でステージを楽しんでいただきました。

この日は台風並みの暴風雨にも関わらず、多くの方にご来場いただきました。

2023年 マティダ市民劇場（宮古島）

離島での公演が実現。地元との連携が重要になるので現地コーディネーターをお願いし、会議を重ねました。宮古島のゲストには発達障害のある三線・唄者を迎え、地元の民謡とオーケストラとの共演に会場が一体となって思わず踊り出す方が多くいらっしゃいました。ボランティアリーダーには宮古島の特別支援学校の先生方に協力いただきました。

2024年 那覇文化芸術劇場なはーと、石垣市民会館 中ホール（石垣島）

石垣島公演の約1カ月前、那覇文化芸術劇場なはーとでも那覇市主催でコンサートが開かれました。那覇市では初開催。有料の試みも。午前・午後の2公演とも小劇場いっぱいの来場者でにぎわいました。肢体不自由で立ち上がることができない男の子が指揮者を体験しました。

「美らサウンズコンサート」の5年間とこれから

だれもが共にいられる場をつくる

2024年9月7日
国際障害者交流センター
ビッグ・アイ 中研修室
（大阪府堺市）

モデレーター
樋口 貞幸
（社会福祉士）

スピーカー
常盤 成紀
（公益財団法人 堺市文化振興財団 事業係長）

小田 多佳子
（特定非営利活動法人 堺障害者団体連合会 理事長）

鈴木 京子
（国際障害者交流センター ビッグ・アイ 副館長）

上原 玲子
（「ゆいまーるミュージックプロジェクト」プロジェクトリーダー）

仲根 建作
（公益社団法人 全国脊髄損傷者連合会 業務執行理事）

落合 千華
（一般社団法人 CoAr 代表理事）

登壇者自己紹介

仲根：全国脊髄損傷者連合会理事の仲根建作と申します。美らサウンズコンサートのプロジェクトメンバーとして車椅ユーザーの立場から参画させていただいてます。ライフワークとしてユニバーサルデザイン、バリアフリーの推進に取り組んでいます。

鈴木：国際障害者交流センターの鈴木でございます。役職的には副館長なんですけど、やってる仕事はプロデュース。いろんな事業の企画と、全国の劇場とか福祉団体のアドバイザー的な役割で全国各地の劇場に赴いております。

小田：堺障害者団体連合会の小田多佳子と申します。うちの団体は11の障害者団体の集まりですが、私自身は団体名でいうと「手をつなぐ育成会」代表をしております。30歳の重度知的障害自閉症の息子がおります。今日は知的障害のある子どもと30年付き合ってきている家族の立場でお話をさせていただけたらありがたいと思っております。

常盤：堺市文化振興財団の常盤と申します。「フェニーチェ堺」という劇場の指定管理などをしている財団になります。僕自身はホールの担当ではなくて、市内の小中学校とか子ども園、子ども食堂、福祉施設など様々な地域の現場にアーティストと一緒に出ていって、地元の人たちと一緒にコンサートを作ったり、ワークショップ、プロジェクトをしたり。加えて地域の現場に関わっていけるアーティストを育成する事業とか、地域の現場とアーティストをつなげるアートコーディネーターを育成するような事業をしています。個人的にオーケストラのコンサートをつくる活動をしております。

上原：このコンサートで培ってきた共生社会へ向けた人材育成の必要性から活動を始めています。この活動をもっともっと深めていきたいなと思っているところです。

落合：美らサウンズコンサートの評価の担当させていただいております。直接いらしてない方にどのように価値を伝えるかということで、芸術文化、子どもの活動についての評価を主に沖縄を中心に各地でさせていただいております。

（第1部）国際障害者交流センター ビッグ・アイのプレゼンテーションのどこに関心を寄せましたか？

【プレゼンテーション概要】

きっかけは障害児の母親の言葉でした。「うちの子、歌舞伎が好きで歌舞伎のテレビばっかり観てるんですよ。でも本物の歌舞伎を観たことがないんです。歌舞伎に連れて行ってあげたいけど、あのシーンとした中で迷惑がかかるから連れていけないんです。重度の自閉症だけど、練習したら、体験して学んだら、ちゃんと観れると思うんです。でもね、練習させてくれる場所ないんですよ」。

ビッグ・アイが催す、知的・発達障害者にむけての劇場体験プログラム「劇場って楽しい!!」は、音の大きさや響き、照明による明暗、鑑賞者としてのルールを、鑑賞しながら学び、「劇場」という場所で映画、コンサート、ミュージカルなどを体験するプログラムです。

上原：あの場合にはこの場合にはというように、きちんと整理されて取り組まれているのに感動しました。

鈴木：ビッグ・アイでしかやってなかったら、ビッグ・アイまで来られる人しか音楽に触れられないじゃないかと気づいたんですよ。いろんな劇場でできる人たちを育てていかないといけない。体系化していくこともすごく重要です。2014年に実験的に始めたんですけど、今の形じゃなかったんですよね。今日こういう子がいて、ここに困ったということを共有して、じゃあどうするかを話し合って、次のルールにするとか改善する積み重ね。今はフルスペックで鑑賞サポートがついていますが、最初は手話もなかったし、字幕もなかったけど、来たお客さんが「うちの子、文字の方がいいんですよね」という声を聞いたら次は字幕を出そうというような積み重ねで今の形になったんです。

プロの演奏というのは、障害児の表情を変えるんだな

鈴木：知的・発達障害者にむけての劇場体験プログラムをビッグ・アイで3年やって、次どうしようと思った時に、このノウハウを広げるためには運営だけでは無理と思ったんですよね。いろんな場所でプロジェクトをやっていこうと思った時に、演者の協力も要りますし、お客さんにもこのプロジェクトを理解してもらわないといけない。全国展開して広げていきたい野望があったので、ビッグ・アイから外に出る時に結構考えました。

樋口：外に広げていく視点を持った時に、それぞれの学びと経験の機会が必要だと気づいていたということでしょうか？

鈴木：ビッグ・アイが頑張っても、演者に理解してもらわなかったらダメというのは気づいていたんですよ。あと、最初のきっかけになった障害がある子のお母さんの「うちの子だって学べるんです」という一言があって。

上原：私たちの取り組みは楽しんでいただくために場所がどこが必要かというところで既存じゃないところから始まっているので、ホールでの学びの機会というところが先を行ってらっしゃるなと思いました。

特にオーケストラコンサートの場合なんですけれども、障害のある人をご招待して、そこから先に進まないというような例を色々聞くもんですから、どのような工夫をされているのかうかがいたいと思います。

鈴木：劇場がやりたいという時は色々アドバイスはするんですけど、2年目からは劇場主体でやってもらうんですよ。地域の劇場でやる時は、その地域のアーティストを使っていただく大前提があって、いくつかお願いする条件があって、劇場にお渡ししています。例えば、60分公演だと50分以内で終わることとか、アーティスト選びの中でこういうことに注意してください、集中が切れないようにMCは短めにしてください、分かりやすい言葉でお話ししてください、楽器を説明するならスクリーンに映してくださいとか。

樋口：地域のアーティストが大前提というのは、どういう理由からなんですか？

鈴木：地域の文化振興でもあるので地域のアーティストを育てていく。この劇場体験で育った人が、今度は劇場体験じゃないところでそういうコンサートができるようになっていくかもしれないし、アウトリーチしていくアーティストにも育っていくというところで、地域のアーティストにお願いするのが前提にあります。経験を重ねていかないと学べないですし、いつも劇場が扉を開いてるよと見せていかないと、障害のある人にとったら劇場なんて行ける場所じゃないんですよ。いつも劇場はみんなをウェルカムでお迎えする気持ちなんですよというところで、継続性は重要だと思っています。

樋口：なるほど。小田さんにお話をおうかがいします。障害当事者の家族として、こういった機会は堺市でも限られているというところはあるんでしょうか。

小田：堺市はありがたいことにビッグ・アイがありますので恵まれた地域かなと思いますが、全てではないのも事実です。私の息子が30歳で、自閉症だと分かったのが3歳の時。よく動き、大きな声も出すんですが、私が元々、舞台、コンサート、劇などを作る仕事をしていましたので、自分の子どもに障害があろうがなかろうが、コンサートに連れて行きたい。25年以上前にチャレンジを繰り返しした時、ぶつかった大きな壁があるんですね。「障害があるんです」と正直にお伝えしたら、「それでも構いません」とはおっしゃるけれども、一歩中に入ると「座っていてください、声は出さないでください、他の皆さんの迷惑になります」と言われる。最初の5分、10分で高いチケットを無駄にした経験は何度もあります。時代が流れて、今こんなに工夫をしてくださる人が沖縄と堺にいることでとても感動しています。私は負けず嫌いですので、なんとかいい音楽、舞台を息子に見せたいと、自分のツテ、コネを活用し、仲間のお母さんとお金を集めて会場を借りて、コンサートをしたりスポーツをやってきました。手作りでしたけど、みんな自分の子どものためなので、必要なものが作れますので、フィットするんですね。子どもたちは落ち着いて参加してくれたんですけども、その時にすごく感じたのは生音。それもプロの、腕のある人の演奏というのは、こんなに子どもの表情を変えるんだなって。あんなにいつも不安になったら小刻みに動くような子がピタって動きが止まるとか、顔が柔らかくなるとか、そういった場面はたくさん見ました。音楽がスピーカーから流れてくるのではなく、目の前のお客さんに合わせて演奏されてると思うので、それが伝わるんだなという経験を何度もしました。

オーケストラが地域コミュニティと関わることの意味とは？

常磐：僕たちはアウトリーチと呼ばれる取り組みで、学校や子ども園に演奏者を連れて行ってコンサートをします。で、少なくない演奏者が、例えば「ピアノは調律されてますか」というようなことをすごく気にしてしまう。コンサートホールじゃないところに行って音楽をする時にホールのような環境を求めてしまうことが、反対にクリエイティビティを狭めてしまっているんですね。クラシック音楽が前提としてしまったことに囚われているのは、聞いてる人にとって面白いと言えない現場を作ってきてしまったんじゃないか。でも、音響もお世辞にもいいとは言えなかった屋外でやったコンサートで、終わった後、最高に楽しかったね！となったんです。このギャップは何だろう。僕たちはその時の環境の中で、一緒に場を過ごすことができたんだなって思ったんです。それはこれまでクラシック音楽やオーケストラが提示してきた作品や芸術とはまた違う提示の仕方であるし、芸術のまた違う立ち上がり方。面白いなと感じるようになったので、出来合いの規制のプログラムを持ち込むことはしないんですね。学校の先生や児童の様子を見て、この子どもたちと一緒に何ができますかねという打ち合わせを大事にしていますし、何回も通う場でしたら、終わった後、振り返りの時間を大切にしています。次にこんなこともできるのかなという話は、当初の計画とは全然違ったりするんですが、そういう時間や発想がみんなから出てきて次の現場が立ち上がることが、僕はすごく豊かだと思っていています。まだ

数もそんなにたくさんできないからこそ、コーディネーターがどんどん育っていくことが大事で、堺アーツカウンシルと一緒にコーディネーター育成の研修をやっています。コーディネーターの人生感が反映されるようなアートの現場をたくさん作っていきたいなと思っています。

樋口：一期一会の機会というのかな。その場にあったその関係性が作られていくことを大切にしておられるということですよね。

常磐：美らサウンズコンサートも、劇場体験プログラムも、社会にとって大切な活動だと感じていますし、芸術のあり方が改めて問われているんじゃないかとすら感じています。美らサウンズコンサートで演奏者の価値観も変わっていったというお話があったと思うんですが、そういう経験をした演奏者が作る音楽は新しい音楽なんじゃないかなと思うんですね。新しい音楽のあり方に出会うということは、障害がある人に限らず僕たち全てにとって豊かで大切なことだなと思っています。

小田：演者の皆さんが、障害者だからこうしてあげよう、障害者だからこんな工夫をしようと進めるのではなくて、本当に素敵な音楽、演奏を楽しむという力を持っている人たちに届ける工夫をしようと思ってくださるところは大きなポイントやなと思いました。

鈴木：みんなが成功体験してほしいっていうのはそういうことなんですよね。障害があるからこうしないといけないではなくて、障害がある人に向けたものだからこそできたっていうようなものをつくっていく楽しさを、アーティストの人たちにも味わってほしい。プロデュースする側もそれが楽しいんで、そういう意味では、興味関心を持ってくれてる人が増えてきたので、社会も変わっていくといいな。芸術でまずそういうモデルを見せていくことがどんどん活発に動けばいいなと思っています。

上原：ある自閉症の子どもたちが集まるグループのところで、演奏者としてコンサートをした時に、夫はホルンを吹きながら立って演奏してたら、右足に1人、左足に1人、私の電子ピアノの椅子のとこに1人……。みんな集まって寝転がって聞いてくれたりして、私もとても幸せだったんですね。
美らサウンズコンサートでは、「自分たちが演奏したことにどういう反応が来るんだろう、それに自分たちも反応するコンサートです」と言っている演奏者がいます。

樋口：美らサウンズコンサートの会場に私も足運ばせていただいてるんですけど、こんな幸せな空間がこの世の中にあるのかっていうぐらい本当に幸せな空間が生まれるんですね。そんなことを抜きにしても、ダイレクトに反応がある。やっぱりあのダイレクトなコミュニケーションを取れることの喜びみたいなのが、その場に満ち溢れてるんですよ。それが場をどんどん豊かにしていくと思いました。

芸術は障害児、障害者の暮らしの中で後まわしにされてしまう

仲根：広い意味で耕す活動が「美らサウンズコンサート」にあるのはまさしくユニバーサルだなというのを僕自身が体感しているので、この活動を音楽だけではないいろんなところに仕掛けていく。公共的なシステムとして広げるために公共施設に対するアプローチ方法をもっと違う形で仕掛けていきたい野望があります。

小田：どうしても芸術は障害児・障害者の暮らしの中で後回しにされてしまう。それよりもまずは今日のこと、生活のことって言われてしまう。たくさんのことを諦めてしまっている障害のある人たちがいらっしゃいます。どうぞその人たちにごく当たり前の素敵な時間がプレゼントできる日が、場所が、もっともっとたくさん広がることを願っています。

鈴木：いろんな環境を整えていくことで多様な人が芸術に触れるっていう中で、やっぱり1番大事なのは、環境の中にやっぱり人も入るということ、人も環境だっていうことを、皆さんのお話聞いて今回改めて思いました。

落合：私は初年度の時、まだ東京に住んでいて出張でパッて1人で「美らサウンズコンサート」を観に行って、リハーサルで号泣しちゃって、東京にいる夫に絶対来た方がいいよと言って電話して子どもを連れて来てもらったんですね。そういう感動をちゃんと伝えられる評価のあり方を改めて考えたいという宿題を思い出しました。

上原：私たちの取り組みで新たな課題が毎年出て、まだ未熟だからかなと思っていたんですが、今日、鈴木さんのお話の中で課題は尽きないという話を伺って、そのお仲間にちょっとは新人で入れていただけているのかなという自信にもつながり、ありがたいなと思いました。皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

プレゼンテーション・トークセッションはYouTubeで視聴できます
https://www.youtube.com/watch?v=emt73Epzj9s